

「韓国農楽の追憶」 神野知恵（国立民族学博物館機関研究員）

(1) 夏休みの後遺症 2020年9月5日刊行

コロナ禍で往来が難しい今、韓国での日々が無性に恋しくなる。私は2006年に韓国留学し、打楽器を用いた伝統芸能の「農楽（ノンアツ）」に出会った。所属する大学のサークルで先輩から毎夏恒例の強化合宿に誘われ、ソウルから高速バスで4時間ほど南西に下った全羅（チョルラ）北道（プッド）高敞（コチャン）郡に位置する「高敞農楽伝授館」を訪れた。

伝授館は廃校を利用した施設だ。当時はエアコンがなく、夏は滝のように汗を流し、蚊と闘いながら太鼓の練習をした。おやつに食べた地元名産のスイカや、普段は見向きもしないチョコパイがびっくりするほどおいしかった。練習後はマッコリで乾杯し、ギターでフォークソングを歌い、朝日が昇るまで語り合う。そうやって都市から集まった大学生たちが1週間、寝食を共にするのだ。

合宿のうち1日は、遠足で海に行った。韓国の西海岸は遠浅なので、干潮の時は水際までの距離が長い。皆で太鼓をたたきながら歩き、干潟に足をとられて転んだり、水をかけあったりして、はしゃいだ。そして泥だらけの姿のまま、夕暮れの海岸で缶ビールを飲んだ。若者にとって、これ以上の青春があるだろうか。

そのとき夢を語り合った仲間たちとは毎年高敞で再会する。私が農楽を研究し続けているのは、何度も繰り返し通った夏合宿の、冷めやらぬ熱のせいだ。



韓国・高敞の冬湖海水浴場で楽器片手に語り合う若者たち＝イラスト・筆者

私が研究フィールドとする韓国南西部の全羅道（チョルラド）は、食文化と伝統芸能の宝庫である。例年、9月には農楽やパンソリなどの民俗芸能コンテストやフェスティバルが開かれ、会場には旬の食べ物を売る屋台が立ち並ぶ。

秋は銭魚（チヨノ）（コハダ、コノシロ）の季節だ。「銭魚を焼くと、家出した嫁も帰ってくる」ということわざがあるくらい、焼き魚にすると香ばしくおいしい。エビの塩焼きも、この時期によく見かける。演舞で汗を流した後に、焼き魚やエビをアテに焼酎をキュッとやるのが芸能者たちにとって最高の楽しみである。コロナ禍で行事が中止になり、意気消沈しているであろう人々の顔が思い浮かぶ。

全羅道の人々の食に対するこだわりは、地元を離れる際に顕著に現れる。他地域で開かれるフェスティバルに招へいされたとき、高敞（コチャン）農楽保存会のお年寄りたちは「何を食わされるかわからん」「体を動かすんだからしっかり食べにやいかん」と、自家製のキムチやおかずを発泡スチロールの箱にいっぱい詰めてバスに乗り込んだ。案の定、現地の食事については散々な酷評ぶりだった。当時はそこまでするかと思っていたが、気づけば私もどっぷりと濃厚な全羅道の味に感化され、今では高価で薄っぺらい都会の料理に出会うと、全羅道方言でケチをつけたい気持ちになる。



公演の後には屋台で一杯＝イラスト・筆者

(3) 羅先生の家 2020年9月19日刊行

私は韓国の民俗芸能である農樂を学ぶなかで、羅錦秋（ナグムチュ）という一人の女流演奏者に出会った。彼女は1938年に全羅南道康津郡（チョルラナンドカンジンギン）に生まれ、それまで男性の芸能であった農樂を女性が演じる興行的演奏グループ「女性農樂団」で活躍した。私が出会ったときはすでに70代と高齢だったが、演奏の腕前は他に類を見ないほど精巧かつ創造的だった。この人のライフヒストリーと演奏スタイルについて博士論文を書こうと意を決し、2013年には韓国に渡り長期的なフィールドワークを行った。

ある秋の日、先生が農樂コンテストの審査員をしに行くというので同伴し、その晩には全羅北道扶安郡（チョルラプドプアングン）幸安面（ヘンアンミョン）クェンドル村にある先生の家泊まった。クェンドルとは、コインドル（支石墓）の方言で、その日もピンクに染まった夕暮れのなかに大きな石がポツポツと見える風景を眺めていた。先生は私のためにわざわざ市場に肉を買いに行き、手料理をふるまってくれた。テレビドラマが煌々と流れる真っ暗な部屋で、腰が痛くて眠れないという先生に、夜じゅうマッサージをした。

先生は19年6月に急逝し、その家も今はもうない。10年程の短い間に、先生からは本当に多くのことを学んだ。秋になると、あの晩の静かな情景がふと思い出される。



女流農樂名人の羅錦秋先生と韓国のクェンドル村＝イラスト・筆者

(4) 秋夕の墓参り 2020年9月26日刊行

今年の秋夕（チュソク）（旧暦8月15日）は10月1日にあたる。その日韓国では皆が里帰りして墓参りをし、家族で集う。私が留学中に研究と生活の拠点としていた高敞（コチャン）農楽伝授館では、毎年秋夕の前に、高敞農楽の基礎を築いた師匠たちの墓参りを行っていた。

高敞では2000年代前半、ソウルから来た若者たちが地域の人々に農楽を学ぶ伝承活動が活発に行われた。私が最初に留学した06年には既に多くの先生方が他界していたが、若い担い手たちによってその脈が受け継がれていた。自分の師匠の師匠にあたる人々の墓参りに行けることを、私はうれしく思った。

丘の上の墓につくと、弟子たちが「先生、ありがとうございます、私たち頑張っていますよ」などと口々に言い、好きだった焼酎をお供えしたり、伸びた草をむしったりした。師匠の墓参りが済むと、伝授館の職員も皆それぞれ地元へ帰った。その際に、1箱ずつ松餅（ソンピョン）と呼ばれる餡の入った餅が配られた。

皆が去ってがらんどうになった伝授館の事務室で、私は一人寂しくアクション映画を見ながら夕飯のかわりに松餅を食べた。そんな孤独な思い出すらも、今は懐かしい。今年は墓参りに行けそうにないが、心の中で先人たちへの感謝を思い、人々の健康を願うばかりだ。



故人を思い出させる愛らしい土葬の墓＝イラスト・筆者